



| | | | | | | |
|--|---------|-----------|-----------|--------|--------|-----------|
| | English | 中文 | 交通アクセス・地図 | お問い合わせ | サイトマップ | サイト内検索 |
| | 受験生の方 | 広大へ留学希望の方 | 一般・地域の方 | 企業の方 | 卒業生の方 | 在学生・保護者の方 |

大学案内

入試情報

教育・学生生活

研究

社会連携

留学・国際交流

学部・大学院等

研究所・施設等

広報・報道

採用情報

校友会・同窓会

支援財団・基金

図書館・博物館等

大学病院

附属学校

[トップページ](#) > [広報・報道](#) > [報道発表・報道された広島大学](#) > [平成19年1月-12月](#) > 第16回ペスタロッチャー教育賞 表彰式および記念講演

第16回ペスタロッチャー教育賞 表彰式および記念講演

NEWS RELEASE



広島大学学長室広報グループ
〒739-8511 東広島市鏡山 1-3-2
TEL:082-424-6017 FAX:082-424-6040
E-mail:koho@office.hiroshima-u.ac.jp
(※@は半角に置き換え送信してください。)

平成19年10月22日

第16回ペスタロッチャー教育賞 表彰式および記念講演のご案内

広島大学大学院教育学研究科とペスタロッチャー教育賞実行委員会は、第16回ペスタロッチャー教育賞の表彰式および記念講演を、下記のとおり開催しますのでご案内いたします。

記

日 時：平成19年11月27日(火) 13:00～14:30
表彰式 13:00～
記念講演 13:30～

場 所：広島大学教育学研究科 K201講義室(東広島市鏡山1-1-1)

主 催：広島大学大学院教育学研究科、ペスタロッチャー教育賞実行委員会

後 援：もみじ銀行、中国新聞社

受賞者：しいのみ学園園長 鼻地 三郎氏

プログラム

- 1 開会の辞
- 2 主催者挨拶 ペスタロッチャー教育賞実行委員会委員長(広島大学長) 浅原利正
広島大学大学院教育学研究科長 坂越正樹
- 3 祝辞 もみじ銀行頭取 野坂文雄 氏
- 4 表彰状授与および胸像贈呈
- 5 記念品贈呈 中国新聞社代表取締役社長 川本一之 氏
- 6 記念講演 ペスタロッチャー教育賞受賞者 鼻地 三郎氏
- 7 閉会の辞

(参考資料)

- ▶ [ペスタロッチャー教育賞受賞者の紹介](#)
- ▶ [過去のペスタロッチャー教育賞受賞者一覧](#)
- ▶ [ペスタロッチャーとペスタロッチャー教育賞について](#)

【お問い合わせ先】

本賞・受賞者に関すること
広島大学大学院教育学研究科 担当：坂越、丸山
TEL:082-424-6731、6730

表彰式・記念講演に関すること
広島大学教育学研究科支援室 総務担当
TEL:082-424-6705

広大公式アカウント一覧



Twitter

Facebook
(日本語版)Facebook
(英語版)

YouTube



行事カレンダー



ストリートビュー



キャンパスカメラ



学内ポータル

ペスタロッチー教育賞

受賞者紹介

しいのみ学園園長

しょうち さぶろう

鼻地三郎氏

鼻地三郎氏は、1906（明治39）年北海道釧路に生まれた。日露戦争に従軍した父に倣い、軍人となることを夢見ていた。しかし、受験した広島幼年学校の初日の身体検査において、目が悪いとの理由で不合格となる。夢絶たれた氏に対し、父は「子供と暮らすか。」と言って広島師範学校への入学を勧めてくれた。以来今日まで、氏は85年間の長きにわたり教育に身を投じることになる。

広島師範学校を卒業した氏は、山村の小学校に赴任する。村の貧しい生活のなかでも、子供は純真でたくましく生きていた。子供らに向けられた氏の眼差しは文学作品として、文芸雑誌『潭海』や中国新聞に発表されている。「早引きをせし 教え子は 田にありて 夕陽を浴びて 稲を刈り居り」は、その1つである。

2年間の教員生活の後、広島師範学校専攻科に入学し寄宿生となる。そこで舎監をしていた教育学者、玖村敏雄と出会う。氏は、玖村から人生観が変わるほど多大な影響を受けた。師のようになりたいと、何十倍もの難関であった広島高等師範学校の入学試験に挑戦し合格した。玖村も、同じ4月から高等師範学校教授に就任していた。ペスタロッチーの『シュタンツ便り』をともに読み、吉田松陰研究の指導を受けた。隣家に下宿を借りて住み、家族のように気にかけていただいた。

再度小学校に赴任後、広島文理科大学で勉学を再開したが、長男が高熱に侵されて、脳性小児麻痺となる。「何としても親の愛情によって、この子の病気を治さねばならない」との一念をもって、心理学による治療法を探し求めた。1940（昭和15）年、請われて福岡女子師範学校に赴く。長男に2年遅れでようやく就学許可があり、同附属小学校に通うことになった。しかし、勤務校の窓から見え聞こえるのは長男のいじめられる姿であり、その泣き叫ぶ声であった。保護者らの無理解も、はなはだしかった。新制中学校に進学しても、

2階から突き落とされるほどのいじめに遭い、長男は義務教育でありながら、学校を途中で去らねばならなかった。

次男も長男と同じ小児麻痺となり、家では就学猶予の次男と退学を余儀なくされた長男が、抱き合って泣いていた。1954（昭和29）年、氏は意を決し、先祖伝来の家屋敷を売って「しいのみ学園」を設立した。子供のことを考えた施設が、基準に合わないとの理由から行政による支援は得られなかった。しかし、それまで教育界から無視されてきた子供に居場所をつくり、そうした行き場のなかった子供の親たちに拠り所を与える施設となった。氏の献身的努力は、手記により広く知られるところとなり、映画化されてひとびとに感動を与えた。

その後も氏は、一貫して障害児教育に生涯を捧げてきた。氏の実践は、その強い教育愛と氏が修めた心理学と医学に裏打ちされた理論によって編み出されている。学会で注目される新知見の創発と子供の成長の可能性を引き出す教材や教育法の開発が、不即不離に展開されているのである。新制福岡学芸大学（現 福岡教育大学）においても、障害児教育の制度化を積極的に進め、常に先進的モデルを示してきた。その影響は日本にとどまらず、1982（昭和52）年に韓国の大邱大学に教授兼大学院長として招かれたのを初めとして、いまなお世界へと広がっている。

鼻地氏の人生の師であった玖村は、学生であった氏とともに読んだ『シュタンツ便り』の「はしがき」を、次のことばで始めている。「およそ偉大なる人の生涯は、その何れの部分をとってみても、そこに全体が躍如として生きているのである。隠れて野に耕すときも、顕れて公に働くときも、成敗得失を一貫して常に全人格の風光が悠々として表現せられている。ペスタロッチーの生涯は、歴時的にいっても決して短くはなく、内容的に見ても極めて波瀾が多かった。」このペスタロッチーに捧げられたことばは、そのまま鼻地氏の生涯を描いているようにさえ思える。生涯を教育に捧げ、「しいのみ学園」という妥協なき教育施設を、まさにそれを必要とする人たちに私財をなげうって創設し、これを支える教育理論と実践を発展させた。この教育を必要としている人たちには、国の分け隔てなく広めていくことを生涯の課題として、なお現役として取り組んでいる。

鼻地三郎氏のこの長年にわたる功績に対し、第16回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。

(参 考)

ペスタロッチー教育賞受賞者一覧

- | | | |
|---------|------------------------|-------------------------|
| 第1回受賞者 | 宮 城 まり子 | ねむの木養護学校校長 |
| 第2回受賞者 | 谷 昌 恒 | 北海道家庭学校校長 |
| 第3回受賞者 | 児 玉 三 夫 | 明星学苑理事長、明星大学学長、明星小学校校長 |
| 第4回受賞者 | 山 田 洋 次 | 映画監督 |
| 第5回受賞者 | NHK名古屋放送局「中学生日記」制作スタッフ | |
| 第6回受賞者 | 本 吉 修 二 | 学校法人白根開善学校校長 |
| 第7回受賞者 | 黒 柳 徹 子 | ユニセフ親善大使 |
| 第8回受賞者 | 社会福祉法人 | 広島新生学園 |
| 第9回受賞者 | 丸 木 政 臣 | 和光学園学園長 |
| 第10回受賞者 | 佐 野 浅 夫 | 俳 優 |
| 第11回受賞者 | 社会福祉法人 | 似島学園 |
| 第12回受賞者 | 九 里 茂 三 | 学校法人九里学園学園長 |
| 第13回受賞者 | 中 野 光 | 日本生活教育連盟委員長、日本子どもを守る会会長 |
| 第14回受賞者 | アグネス・チャン | 日本ユニセフ協会大使 |
| 第15回受賞者 | 津 守 真 | 学校法人愛育学園理事長 |

ペスタロッチーと ペスタロッチー教育賞

広島大学大学院教育学研究科は、もみじ銀行及び中国新聞社の後援を受け、今日、我が国の極めて困難な教育状況の中で、優れた教育実践をおこなっている個人あるいは団体を顕彰するため、先のペスタロッチー賞の精神を継承し、ここにペスタロッチー教育賞を創設した。その趣意として、以下のことが挙げられる。

教育の荒廃が叫ばれる中、優れた教育を地道に実践し、「真教育」の原点を示している実践家並びに団体を顕彰することは、これらの人々を勇気づけると共に、その活動を社会に広め、活性化させるために、極めて重要なことである。この賞は、混迷する教育の現実に対して、教育の原点を示し、我が国教育の立ち直りのきっかけにしようとするものである。その象徴としてペスタロッチーの名が称えられよう。ペスタロッチーは民衆教育の父であり、教育の実践家として、子どもへの限らない愛情と慈しみを身をもって示した教育者であった。同時に、多くの困難を克服しておこなわれた教育実践から編み出された教育思想・教育理論は、単に18、19世紀の所産としてではなく、常に「真教育」の象徴となり、今日に至るまで世界の教育を動かし、教育の原点を示すものと考えられている。とりわけ、本研究科には、大正10年以來のペスタロッチー研究及び運動に関する長い伝統があることも忘れられてはならない。

ペスタロッチーの実践・思想・理論には、今日の教育荒廃を克服するための方途を示す力があると確信される。ペスタロッチーの精神を教育の原点として捉え、優れた教育を実践している人々を顕彰することは、正に今日の教育にとって「地の塩」となる。

ヨハン・ハインリヒ ペスタロッチー

JOHANN HEINRICH
PESTALOZZI

スイスの教育家・教育思想家。1746年、チューリッヒに生まれる。チューリッヒの大学に学び、そこでルソーその他の革新的な啓蒙思想に触れ、政治の改革を求める学生組織「愛国者団」に入る。その後、農業を志し、アンナ・シュルテスと結婚、農業経営のかたわら、貧児・孤児の教育事業に着手する。1781年、教育小説『リーンハルトとゲルトルート』を発表し、絶賛を博す。シュタンツでの孤児救済の活動を経て、1800年、ブルクドルフ、1804年、イヴェルドンに学園を開く。『モーデの精神と心情』『ゲルトルート教育法』など、多くの著書を刊行する。学園は、多くの国々から参観の人々が集まり、教育実践研究のセンターとなって、ヨーロッパ、アメリカにペスタロッチー運動が広がる。1825年、弟子たちの内紛から、学園を閉鎖してノイホーフに退き、1827年、ブルックにおいて没す。81歳。

ペスタロッチー墓碑銘

ハインリッヒ・ペスタロッチーここに眠る。
1746年1月12日チューリッヒに生まれ、
1827年2月17日ブルックに没す。
ノイホーフにおいては貧しき者の救助者。
「リーンハルトとゲルトルート」の中では
人民に説き教えし人。
シュタンツにおいては孤児の父。
ブルクドルフとミュンヒエンブーフゼーとに
おいては国民学校の創設者。
イヴェルドンにおいては人類の教育者。
人間！ 基督者！ 市民！
すべてを他人のためにし、
己には何物も。
恵みあれ彼が名に！